

郷土館だより

Vol. III No.3

1981. 4. 1



三島水まつり (7月15日・16日、白滝公園)

目 次

郷土史の散歩道(9).....	1
三島の民話に寄せて.....	3
資料紹介.....	5
行事報告.....	6
寄贈資料紹介・おしらせ・その他.....	7

郷土史の散歩道 ⑨

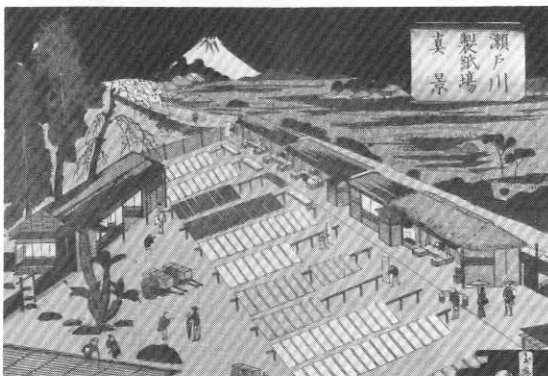
三島の水と明治の産業

三島は水の町と言われている。しかし現在では湧水量も少なく、昔の面影はない。かつて川に沿った家々では、自分の屋敷内に水流を利用して水をとり入れ、庭を回した水は下流へ再び流れるように工夫していたものだった。水の流れと人々の生活は、今では信じ難いほどに密着していたものと言えよう。

ところで明治時代の三島の水はどのように利用されていたものだろう。もちろん飲料用を始めとした日常生活用水であったわけだが、この水を積極的に工業用水として利用し、ひいては三島全体の産業の興隆を目指していた人々がいた。

郷土館では今年9月から物別展「明治の三島」を開催する予定であるが、その準備資料の中から拾い出した昔の水と町の関係を、ここに取り上げてみようと思う。

遠い明治時代を想い起しながら、今、川の流れに沿って散策してみてもいいだろうか



瀬戸川製紙場真景。富士山を背景にした製紙場の錦絵を刷り、出荷用の製品のカバー用紙とした。瀬戸川製紙場の商標にもなっていたようだ。

(中央町 河辺富衛氏提供)

製糸工業

明治期における三島を含んだ田方郡下の製糸工業は、県下でも屈指の隆盛をみたのであった。三島市誌掲載の資料によれば、この時期の三島内の工場は次のようである。

経営者名	創業年月	職工数	男	女
河島新兵衛	明治23. 6	5人	50人	
井出勝弥	" 27. 6	2人	24人	
鈴木善太郎	" 29. 5	2人	25人	
長倉惣吉	" 29. 6	2人	60人	

こうした工場数及び職工数(工場の規模)の田方郡下の総数を、県内各地との比較で見れば、前者は第3位、後者は第2位であったようだ。一体なぜこのように製糸業が盛んであったのだろうか。

まず言えるのは夏冬変わることのなかった豊富な水の流れであろう。製糸工場の繰糸器械を動かす動力は、当時すでに他工業に先がけて蒸気機関が採用されていたにも拘わらず尚動力の主流は水力利用であった。水車を回し、座繰器械を動かし、工場内では女工さんが釜の中のマユから糸を引き出す作業を行っていたのである。

しかし、動力には最適の三島の水も製糸の洗い晒しには適さなかったという。「鉱質」がなくてよくないということで、河島製糸工場では箱根の湖水の水を引いて用いたということである。

『三島雑記』(山崎金吾著 明治29年発行)の河島製糸工場の項によれば、ここで出来る糸は「品質善良頗る光沢を有し、常に優等の声価を市場に保つ、而して其の製品の多くは仏国に向けて輸出す、毎年の製出高五十梱にして……」とあり、北豆地方第1位の工場であったと記している。

因みに日本の近代化と製糸工業の隆盛についてみるならば、明治末年頃から昭和初期に至るまでの製糸業は、外貨獲得のエースであり、日本の近代化を支えていたものと言える。政友会代議士武藤金吾が「生糸は金なり」と叫んだのは大正3年のことであった。

地機と染物屋

製糸業の発展を支えていたもう一つの力は、三島・田方一円の養蚕農家であった。良質の桑を産するこの地方では、当時たいていの農家で養蚕を業としていた。しかし外貨獲得用の高級絹糸となる繭は、殆んどが繭仲買人を通して製糸業者に売り渡され、一般の人々の衣料をまかなうものではなかった。農家では繭を選別し、手元に残るのは出荷用にならないクズマユだけであった。クズマユは自家の座繰(くら)にかけられ糸となり、ハタゴにかけて子供達の「晴着」用の布となった。こうした地機も養蚕農家ではたいていやっていて、それは農村の女達の楽みな仕事の一つとなっていた。

周辺農村で地機が盛んに行なわれるようになると、三島の町では染物屋(紺屋)が繁盛するようになった。農家で織った白布が三島の染色業者に持ち込まれる量は相当なものだったと想われる。そして、なによりも三島には、染色業者が最も必要とした澄んだ水があったからであろう。

製紙工業

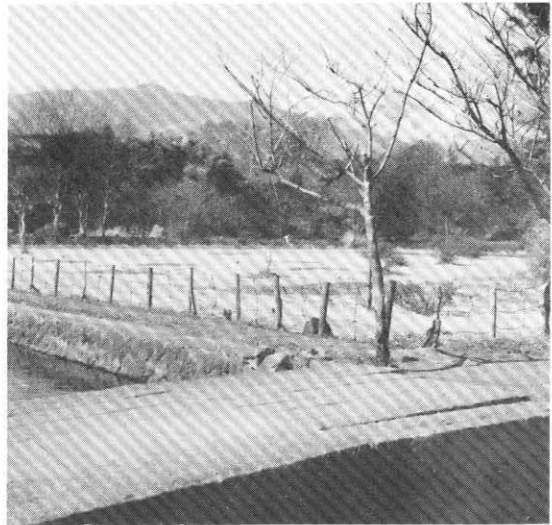
三島に製紙業があったことを知る人は今ではもう少ないであろう。河辺製紙場（創始者河辺富助翁）は、元宮町裏の瀬戸川の水流に沿ってあった。この工場より産する製紙は「瀬戸川改良紙」と称され、品質も優れ、第2回内国勸業博覧会に出品して3等賞を、明治16・17年の森岡（盛岡か）共進会では2等賞を得るなどの榮譽を受けている。

場主河辺富助翁の苦心は、瀬戸川の清流を何とか良質の晒製紙に利用できないか、箱根山に生ずる女竹で唐紙を作れないか、桑・柳等を製紙の原料に使えないかなどの点であったという。ことに瀬戸川の清流は、水は澄んできれいであったが、鉄分やアンモニア分を含有していて良質の紙作りには不適當であったため、翁は薬品を用いて水質の不利を克服したのであった。河辺製紙業は、いわば近代製紙業の先駆者であったと言えるであろう。



現在でも三島の水を利用した染物屋が営業している。しかしその数は、昔とは比較にならないほど少なくなった。（東本町 遠州屋染物店）

ところで製紙工場のあった場所であるが、『三島雑記』には「宮町裏の瀬戸川沿い」とある。ところが現在三島に「瀬戸川」という川はない。河辺家の子孫であられる河辺富衛さんにうかがったところ、やはり「瀬戸川」という川については御存知ないということであった。しかし元の屋敷があった場所等から推測すれば、今の御殿川筋がそれに当るように思われる。水泉園の池から桜川に流



水上の水流。白滝公園から大社方面に少し下ったさくら川のほとり。背景の富士には真白な雪がまだたくさん見える。冬であろう。しかし水流は現在の夏よりもずっと多かった。

（一番町 緒明太郎氏提供）

れ出た水が、「ドンドン」と呼ばれる滝となって御殿川に流れ込んでいる辺りからその下流にかけての一带が製紙場であったようだ。

河辺製紙場は順調な生産を続け、その製品は「色紙、襖用大平紙等を製出し、京都、大阪、名古屋、東京、仙台、森岡等の各地へ輸送して、頗る声価を博し居れり」（『三島雑記』）ということであったようだ。

今三島の水は

明治時代、三島の豊富な水を利用して製糸・製紙業を起し、見事に成功させた祖先たちがいたことは以上みてきた通りである。私たちは今、先輩から「昔は水車があっちこっちで回り、川は清流を満々とたたえていた」という話を聞く。しかし話しは現状の川とは余りにも隔りがあり、もう一つピンとこない。「三島の水」は伝説になってしまうのだろうか。

『三島雑記』や古い写真等の資料に触れる時、三島の水と町との関連は急速に現実味を帯びてきて、私たちは昔のふる里を身近に感じることができる。

郷土館では、これからも古文書・古文献の中から、より正確な私たちのふる里を再発見していきたい。

（杉村 斉）

三島の昔話に寄せて



この度、三島市市制施行40周年記念事業の一環として、「三島の昔話」を編集出版することになりました。

そこで、そのご案内をかねて、本市に残る昔話の特徴を、簡単に申し上げてみたいと思います。(ここで昔話といえますのは、現在よく使用されている「民話」と、同義語とご了承願います)

三島の昔話として、現在郷土館に収集されているものは、大小併せて150話ほどです。もちろん市内外には、収集し残された口伝の昔話が、まだ相当数眠っているとされます。また、すでに文献として記録されたものの中にも、見落とされているものが少なくないと思います。

これら、未収集の昔話の中にも、三島にとって貴重なものがいくつかあると思われまます。しかし、現在手中にあるそれが、種々の事由から推察して、大体三島の代表的昔話と考えてよかろうと思われまます。

そこで、この150話の内容と、その収集過程において印象づけられた感懐を本にして、三島の昔話の特徴を次の様にまとめてみました。

1. 聖地物語

三島の地域的特徴の一つとして、「聖地性」ということが考えられます。したがって三島の伝承の中に多分にそれが現われています。そして、その代表的なものが、「三嶋大社の話」なのです。

それについては、先ずご祭神に関する伝承を挙げなければなりません。もちろん現ご祭神「ことしろ主神」「おほやま すみのかみ大山祇神」に関するものが絶対多数ですが、中に「おもたのふもと面足尊」説もあります。これは大社ご祭神に関する神話の、規模の大きさを物語るものです。

次のご神徳と奇跡に関するものですが、「盲鶏

の眼のあいた話」「雨乞いの話」「神馬の話」など三嶋神ならではの内容です。

また「大楠と蛇頭」「たたり石」なども、古い玉垣の内の伝承です。

源頼朝が残した「腰掛け石」「衣掛け松」「経塚」なども、三島の聖地性から生まれた内容のものが多いのです。

2. 地蔵物語



(鼻取り地蔵)

地蔵尊は、何所の土地でも最も庶民に親しまれて来た仏様です。見方に依っては、地蔵尊は人間の切な願望、喜怒哀楽、うらみつらみなど、そっくりそのままに、人に代って世に訴えているものともいえます。

したがって、地蔵尊にまつわる昔話(主に縁起)は、その土地その時の人々の心情の実態を、そのままに伝えているものと考えられます。

三島の地蔵尊としては、

- 蓮馨寺日限地蔵尊 ○西福寺成就地蔵尊
- 田福寺子安地蔵尊 ○法華寺言成地蔵尊
- 光安寺鼻取地蔵尊 (以上駿河一国百地蔵尊の中に、第96番から第100番までとして)

○手無地蔵尊(手無) ○火除地蔵尊(市の山)

- 芝切地蔵尊(山中新田) ○親知らず地蔵尊(別名脚気地蔵尊・箱根峠)
- 誓願寺眼洗地蔵尊
- 赤王左司右衛門地蔵尊

などがそれです。

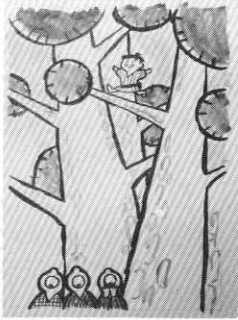
この中では、「言成」「手無」両地蔵尊の伝説が比較的よく知られていますが、その他についてはあまり普及していません。しかし、調べてみますと、その土地柄をよく表現した縁起が、なかなか多いのです。

ところで、宿場の中心に近かった下田街道沿いには、封建の哀話として「言成地蔵」が、箱根西坂には、天下の険「箱根路」にふさわしい、「親知らず」「芝切り」の地蔵尊があります。

そして、「眼洗地蔵」や、「左司右衛門地蔵」

は、昔「村方」と呼ばれた農村地帯の素朴な信仰や人情をよく物語っています。

3. 動物奇談



「天狗」の話

三島は古くから、「伊豆安宿^{あづか}」と称しても決して過言でないほどの、人々の安住の地でありました。気候もよく、物産も豊かで、しかも水に恵まれた叢林の地です。これは鳥獣にとっても絶好な生息条件です。

こうした土地柄に依るものでしょうか、三島の動物伝承は、昔話特有の「奇想天外」さを存分に発揮しながら、しかもほどよく道徳的で、まことに心暖まる物語が多いのです。

「孝行犬の墓」の話は、三島の代表的な伝承の一つです。これは仮空的な装飾の最も少ない実話、といった方が適切かもしれません。しかも現在円明寺^{えんめいじ}には、その実証ともいべき墓石も伝記もりっぱに遺されているのです。この様に伝承と遺跡と二つながら完全に保存されていることは、本当に貴重なことと考えます。

話の内容は、人も及ばない孝行な犬の物語です。しかもそれが、人でなく犬が主役であるところに、返って孝行の押し売りにならない。さわやかさがあるのです。ここにも昔話の良さが、存分に発揮されています。

「狐の恩返し」「蛇息子」「蛇」の話は、あるいは全国各地に類例の多い型式のものかもしれません。しかし、舞台となったこの地域が、まことにその内容にぴったりですから、とても借り物の話とは思えません。たぶん此所で生まれた話が、偶然にも他所のそれと一致していたものと思われる。

それにしても、玉沢に伝わる「がま蛙」の話は、東海の大寺妙法華寺を控えた玉沢ならではの内容です。

4. 武将と歴史物語



「七人頼朝」の話

三島は徒歩交通時代、東海道屈指の要駅として繁栄した町です。そのため日本歴史や、その主演者である一流人物とも、なかなか深い縁のあった町です。したがって、それに関する遺話も相当な数に上っています。

源頼朝を出頭に、北条早雲、徳川家康、徳川秀忠、徳川家光、あるいは足利義詮^{あしかがよしかん}、仁田忠常、大庭景親、大高源吾など数多い武人が話題を遺しているのです。

流人頼朝の源氏再興の悲願にまつわる話は、彼の厚い信仰ともからんで、配流20年の苦節がよくしのべれます。

山中城の攻防は、戦国の終末を飾る一大絵巻物の1巻です。わずか1日限りの決戦でしたが、その歴史上における意義はまことに甚大でした。

それだけに、山中城攻防の秘話は相当の数とされます。ここでは、北条方城先松田康長、同じく副将間宮康俊一家と、西軍の先峰で、秀吉にその死を惜しまれた一柳直末の悲話を中心とします。

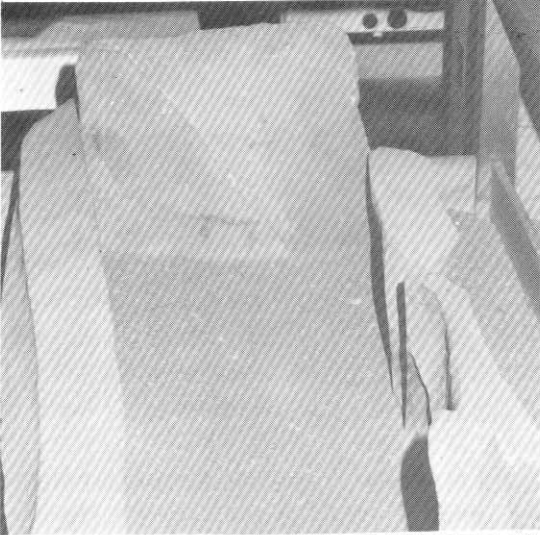
徳川家3代の、家康、秀忠、家光にかかわる逸話は、3人各様の個性が如実に表現されていて、昔話の楽しさを十分味得させてくれます。

また、「赤王の長者」として、独特な伝承を里に生ませた一族も、あるいは戦国争乱期の郷土史を飾る、重要人物の1人かも知れません。まことに謎の多い物語の主役でありました。

以上が、三島の昔話を構成している4本の柱であります。そして、これが三島の歴史とも深く関係を持っています。したがって三島を十分理解するためには、歴史と昔話を表裏一体の関係において把握しなければなりません。

資料紹介 (館蔵品)

■展示品見学の手引 —石棺(楽寿園西口古墳出土)—

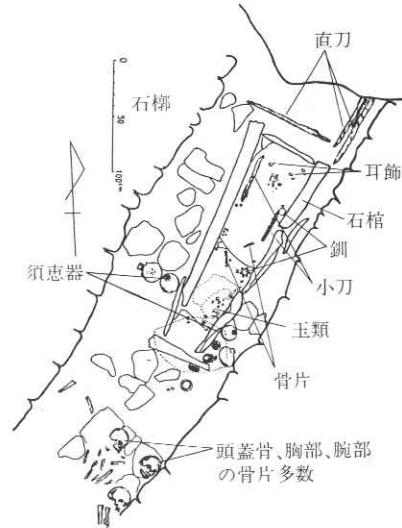


石棺 (郷土館3階に展示中)

石棺とは文字通り石の棺のことで死者をいれるために使用された物である。当館3階に展示してある石棺は、昭和30年1月に、楽寿園の西側(西門近く)で発掘されたものである。この石棺が埋っていた古墳は楽寿園西口古墳と称され、幸原古墳群の最南端に位置するものの一つであったが、石棺発掘当時には以前の道路工事によって墳丘は破壊されていて、その形状や大きさは明らかにすることは不可能であったようだ。石棺の発見は偶然のことであった。この年、道路下に水道管を敷設する工事が進められていて、工事中路面下30cmの所に現れたものを見つけたものであった。知らせを受けた三島市誌編纂委員の故郷部先生、長田先生及び日大考古学研究室の人たちが、工事に追いかけられながら発掘調査を開始したのであった。

石槨・石棺の構造等

石棺を納める石槨は工事により天井部分が除去されていたために全体の構造は不明である。槨壁を構成している石材はこの地方特有の気泡の入った火成岩である。郭の幅は奥壁側が1.3m、前側が1.2m、中程より少し奥壁寄り部分が1.5mで全体的には舟形の郭であったようだ。発掘は槨全長4.3mを行なったのにとどまり、おそらく6m以上あったであろう全体を調査できなかったのは残念なことである。



楽寿園西口古墳実測図 (市誌上巻より)

石棺は結晶片岩の板状石材を8枚組み合わせた舟形石棺である。底部には3枚の同質の石を敷きならべ、蓋は5枚の板石でおおい、石棺内部の副葬品及び遺骸を納めていた。長さ2m、奥の幅は55cm、前方28cmの構造である。

遺物

石槨内及び石棺内には多くの遺物が発見された。古墳の遺物には死者に添えて埋められる副葬品が多く、それが古墳の時代判定をする重要な手掛りとなる。また葬られた故人が、生前どのような権力の持主であったのかとか、当時の文化模様等も知り得るなど、副葬品が後世に伝える意味は大きい。楽寿園西口古墳は舟形の郭、石棺の形体から人為的に釉薬を施してある横瓶(副葬品)から、古墳時代最末期に近い奈良朝以降のものであろうと判定されている。

出土遺物には次のようなものがあつた。大刀5振、素環耳飾8個、刀子1振、銅製素環劔1個、銅製六鈴劔1個、水晶切子玉5個、琥珀棗玉4個、銀製密柑玉約10個分、滑石製小玉4個、管玉1個、玻璃製小玉27個、鉄片10数個、須恵器7個(横口瓶3個、提瓶2個、甌1個、蓋付盃1個)、人骨多数(この石棺内には男女2体が埋葬されたものと推定されている)

(三島市誌上巻を参考)

行事報告

～郷土館「お飾り作り講習会」～

55年12月14日(日) 参加者 25名

講師 市内川原ヶ谷 芹沢貫一氏

正月行事には欠かせない、注連縄を市民の手で作ってもらい、行事の意味を深く理解してもらった。

注連縄

この注連縄というのは、内外の境界や出入の禁止などを、しるしに引きわたすシルクメナワのことであり、とくに、神前に引いて清浄の場を区画するのにもちい、正月には、門戸に張りめぐらし、禍鬼の、内にはいらないようにとのところをあらわすのにもちいられた。

この縄は、稲稈を左ないになってつくるのが法であった。その縄のあいだに、七条、五条、三条のわらを下げたことから、七五三縄とかいて、シメナワとよんだ。農家では、26日を、シメナワないの日とし、その翌日を御松採の日とした。

正月の十飾り

正月の飾り物には、語呂によせての祝いがあった。

- ▷ゆずり葉（讓葉）—あたらしい葉がでて、旧葉がはじめて落ちる。家督を子孫にゆずるのをことほぐところ。
- ▷橙—代々の義にとり、代々繁栄をことほぐ。
- ▷裏白—心明白にしてうしろ暗いところなきをことほぐ。また、諸むきとって父母相生を祝する義。
- ▷ところ（野老）—分にやすんじ、所を得るのところでことほぐ。
- ▷熨斗—身代をのしのころ。
- ▷炭—住みの語呂にかよわせ、住みよい地にすゝみとことほぐ。
- ▷昆布—よろこんぶのころ。
- ▷串柿—宝をかきよせる。のちには、九子賀喜などと語呂をあわせる。
- ▷蝦（海老）—海老というところから、偕老のカイロウに通じさせ、家長夫婦の長寿をことほぐところ。
- ▷勝栗—なににつけても、欲を制しおのれに克つところから、運に勝つをことほぐ。

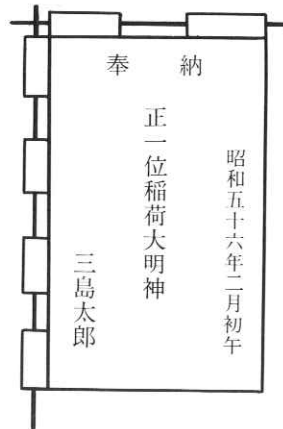
こうした十飾りは、いつともなく、新年をむかえる節日の飾り物となり、注連縄につるされて祝われたのである。

（図説 日本民俗学全集）

～郷土館「初午幟り作り講習会」～

節分がすぎてからのさいしょの午の日、この日は稲荷大明神の祭礼の日、すなわち初午祭だといっているので、むかしから、日本じゅうの稲荷神社で初午祭がおこなわれた。

郷土館では、毎年初午祭の前に、小学生を対象とした講習会を開いている。今年は19名が集まり行なわれた。講習は、赤、紫、緑、黄色の順に紙を貼り、その上に筆で字を書き旗を作った。つぎに竹を小刃で切ったり、穴をあけたりして幟を作った。



初午祭の起源

この初午祭の起源については、つぎのような由来がある。

いまから千三百年ものむかし、元明天皇の元年正月に、武蔵国から銅がささげられた。それを記念して年号を和銅とあらため、三年三月、大和国平城に都がうつされた。

そののち、弘法大師が、稲荷をかついだ翁の示現によって、山城国伏見に稲荷社を建てたことがもとで、都が平安にうつされてのち、稲荷神社は、りっぱな社殿をもつようになった。

三箇の峰の稲荷社が鎮座したのは、和銅四年二月七日のことであったといわれる。ところが、その日は、ちょうど二月初午の日にあっていたので、いらい二月初午の日に、稲荷神社では、恒例の祭事をおこなうようになった。これが初午祭、初午詣のはじめなのである。

稲荷社が社殿をもつ以前は、塚を社座としてまつっており、現在でも、稲荷神社の境内に、古塚がのこされていることがある。

その後、稲荷の神験が世にもてはやされるとともに、初午祭も盛大におこなわれるようになった。

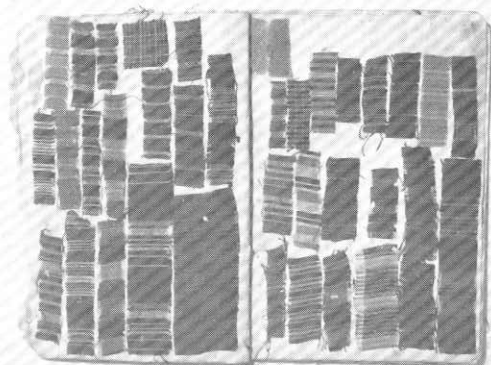
■寄贈資料紹介■ (S55.11~56.2)

日付	提供者	住所	資料	点数
55. 11. 14	緒明太郎	市内一番町15-1	アンカ	1
" 12. 6	杉沢郁哉	市内安久17-4	船大工道具	17
" 12. 13	岩井一直	市内幸原町2丁目7-53	マユ撰別機、弁当箱 他	9
" 12. 24	室伏らく	田方郡函南町平井1110-2	手織り木綿縞着物	1
"	大隅英一	市内大場1035	縞帳、外	6
"	河辺富衛	市内中央町2-23	瀬戸川製紙場真景錦絵	1
56. 2. 9	梅原甫	市内本町1-32	臼、杵	2
" 2. 18	荻原きよ	市内東町2-26	織物絵	1
"	海野謙三	市内千枚原210-79	写真(チンチン電車)	1

縞帳にみる昔の女性のおしゃれ心

市内大場に住む大隅さんから一冊の縞帳を寄贈していただいた。古びた和紙を何枚か綴じた帳面には、同じ模様が二つとない小さな縞織りの切れが、ていねいに貼り付けてあった。

現代の女性たちは、さまざまなファッション雑誌の中から、好みの最新流行のファッションを選ぶ。同様に昔の女性たちは縞帳の中から、自分の織りたい縞模様を探したものであった。古今共通の女性たちのおしゃれ心があるのだろう。



★★★★★おしらせ★★★★★

■郷土館の行事予定■

- 4月1日(水)~4月5日(日) 春の映画教室
- 4月24日(金) 市内史跡めぐり
- 5月24日(日) 玩具作り
- 9月1日(月)~11月30日(日) 特別展「明治の三島」
- 7月29日(水)~7月31日(金) 親子郷土学習会
- 8月1日(土)~8月7日(金) 夏の映画教室

■刊行物案内■

「三島の昔話」 《頒価》 500円

市制施行40周年を記念して、「三島の昔話」を一冊の本にまとめました。

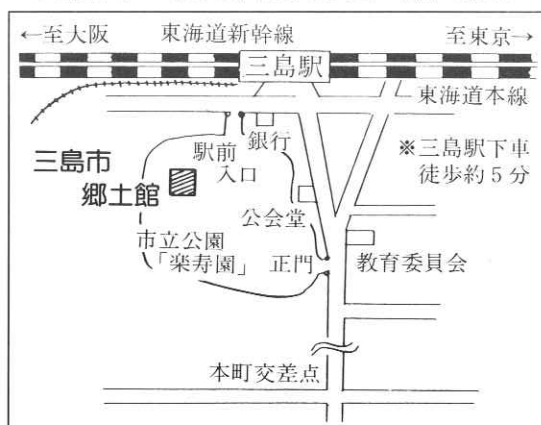
昔から、おじいさん、おばあさんによって語りつがれた、なつかしい話がいっぱい集められています。

市民の皆様が「昭和の語部」になって、子孫に口伝して下さい。

この本は、4月1日(水)から、市役所出納室、市立図書館、郷土館の各窓口で販売しています。

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日~1月2日
 開館時間 午前9時~午後4時30分
 入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.9

昭和56年4月1日発行
(年3回発行)

編集 三島市 郷土館
 住所 〒411 三島市一番町19-3
 TEL 0559-71-8228
 発行 三島市教育委員会